

# 2005年ケーララ・スタディツアーの記録

(9月15日～26日)

島岡 光一 記す

①9月15日 9時 成田駅第1ターミナル 出発ロビー、AカウンターX線前、谷本、佐藤、島岡集合。ややあってまりえ合流。9時半頃、良太、直孝参集。10時頃、チェックイン。イミグレーション後、日程のチェック。谷本、佐藤に島岡製作の名刺を手渡す。

搭乗

ビジネスクラスとエコノミークラスと取り扱いが異なる。

- 1) ラウンジを無料で飲み物、おにぎり、くだものが食べられる。
- 2) ボーディングの入り口が異なる。
- 3) いすが広くほぼ180度リクライン可能。
- 4) 3種類のフルコースから選べる。飲み物(酒類も含めて)は飲み放題。
- 5) 搭乗員が絶えずご用を訊きにくる。そしてチャットを楽しむ。たとえば、サトウさんはあなたが美しいと言っていると自分を売り込む; she finished fish dish). と駄洒落; コーヒーを注文すると、どんなコーヒーがいいかと訪ねるので、あなたのお好みでお願いという; ビジネスクラスの食事はひどいもので昼飯なんか焼き芋一個を象にえさを与えるような調子で投げてよこすんだよ。

11時20分 離陸。予定通り。

定刻にシンガポール着。島岡やや風邪をひく。空港内でおのおの両替。

島岡 100ドル→ルピー

以後、記録は現地時間。

18.35 ボーディング

silk airways MI498便。前部座席がビジネスクラス。

白人夫妻と佐藤・島岡の4人のみ。佐藤はほとんど何も食べないが、スチュワーデスがひっきりなしに何かを薦めにくる。たった4人だからやむを得ないのだが、うるさい。

トリバンドラムに着いてアライバルに向かうバスはビジネスクラスの4人のみ。4人で大笑い。

現地時間20.50着。出国したが、RIKOの出迎えはない。風邪をひいたかと思われるくらいに機内やシンガポール空港は寒かったが、外気は蒸し暑い。イルミネーションがやたらついている。連絡のしようがなく、6人はRIKOが時間を間違えているのだろうということで、辛抱強く待つことにした。やがて21.50ごろワゴン車でRIKOが登場。ここでタクシー一台に荷物とRIKOを乗せ、ワゴン車(ハイヤー)に6人が乗り込み、30分ほどでホテル「インドラプリ」(ベーカーリー・ジャンクション付近)に着く。

タクシーは250ルピー

島岡だけダブルベッドルームで一人。他はダブルベッドルームに二人ずつの配分で、24時近くから島岡のルームでミーティング。長めの自己紹介。島岡が一番長かったかも。RIKOがトリで、業務連絡。日程の説明。全員5000ルピー徴収。

島岡、佐藤さんから150ルピー拝借。

現在ハッピー・オーナム Onam とかで、盆正月一緒にしたホリディ中だとのこと。イルミネーションはそのためのものとRIKOが説明。それと同時に両替は不可能ということだった。

ミーティング最中、ふみさんから電話。

午前1時頃。散会。

② 9月16日

午前、共産党マルクス主義指導者を訪問。午後は民青や女性部に当たる幹部と会談。夕食はケーララ友好協会幹部と会食の予定。

想定質問。

GREETING: you are celebrating Thrivonam right now. We have no idea of onam. ….

- A) 政権と掌握しているか？州知事は共産党員か？議会構成 distribution of assembly seats？
- B) 50年代から政権を担当していると聞かすが、中国、ベトナムなどの例外は別として though it is exceptional、珍しい例である。その原因は？
- C) 支持者はどんな人々か？
- D) 共産主義と自由との関係は？
- E) 党の綱領や規約があるか、あれば見せていただきたい。
- F) 日本共産党との関係は？
- G) われわれ日本国、あるいは日本民間人に何を期待するか？
- E) 共産党の組織原理は？
- F) 共産党は唯一のアバンギャルドか？それとも他の政党の一つか
- G) 党員数は？
- H) われわれ日本人は唯一の被爆国民 atom bombed nation である。日本は核兵器を保有していない though we have the US-Japan Security Treaty, that is, we live under of the American nuclear umbrella。われわれは核戦争をしてはならないと決意している。インド国家が核兵器を保有していることに対して共産党はどのように考えているか？イラク戦争でアメリカによって使用されている核兵器に似た兵器 deleted uranium bomb についてどう思うか？
- I) 識字率と共産党マルクス主義
- J) 教員養成

青年部との会談、想定質問。

- A) ケーララ青年の最大関心事は？
- B) 恋愛、結婚の自由とカースト制度については？
- C) 非行 delinquency (prostitution, drug, slow down from school, long absence of kids HIV infectious disease, bullying a or some particular kids in class, parasitism to their parents till late 30' s years old…) については？
- D) 青年同盟の綱領と規約？入会の資格条件。共産党マルクス主義との関係？共産党マルクス主義と同一視 (equate) してよいか？
- E) 青年同盟の当面の基本方針は？
- F) 青年同盟の悩みは？ 失業、中東からの送金 remittance は？
- G) 全学連のようなものがあるか the state union of students or all national centre of students union
- H) 日本の青年に何を望むか？

女性にたいする想定質問

- A) 結婚と恋愛の自由があるか？カーストを超えて
- B) 母系制 matrilineal society と女性の地位について

- C) 乳幼児死亡率の低さと女性の高学歴との関係
- D) 女性のエンパワメントの基本は？
- E) 何人子供がほしいか？
- F) 高学歴女性の失業が多いと聞くが？
- F) 女性のパラサイト現象について
- G) ダウリング dowrying についてどうして高いか？

10.00 ケーララ共産党マルクス主義本部に到着。アポを取った人物が不在で、7日間の休暇を取っているという。途方にくれてRIKOがその人物に連絡をとると、15時頃自宅まで来いという。そこにふみさんやタナ（全学連にあたる組織メンバー）が現れる。そうしてケーララ支部の共産党マルクス主義指導者が通りかかる。ふみさんが追いかけて行って、交渉を始める。1時間後にその指導者が会って質問を受けるという。

いったんふみさん宅に行って、お茶をする。ここでタナ（法律学校の学生3年生）に様々な質問を浴びせる。彼女は共産党員のメンバーであり、教育の不平等と戦っている。恋愛結婚を望んでいるが、それは親の許諾と決定を得られないととても困難だ。しかし、そのようなシステムと戦っている。趣味は古典ギリシャの芝居を演ずることだ。後にタナはインド全学連のケーララにおける活動家だということがわかる。

お茶の後、共産党マルクス主義本部にもどって、先の指導者との会見が始まる。→録音  
そのあと13時過ぎ、ふみさん宅に戻り、手作りのおにぎりをごちそうになる。そしてタナと合流して、インド学連ケーララ支部のオフィスを訪ねる。若い代表二人と何を学連がし、戦っているかを聞く。

そして、15時過ぎに、共産党の長老の自宅のパティオにおいて、ケーララにおける共産党マルクス主義の歴史を熱くかたるのを聞く。女性たちは蚊に食われるままになった。→録音  
ケーララ共産党マルクス主義の独創性と創造性を強調された。それはある面ではオールドファッションだが、他面では新しい波へのアダプティブな側面を見せつけてくれた。

長老にまりえが自発的に5円玉をプレゼントして、きれいな英語でその意味を説明していた。

18時過ぎにホテルに戻ってきた。

19時過ぎ、ヴィジャーが二人の幼い息子を伴ってわれわれのディナーに参加した。会場は当ホテルの屋上にしつらえられた。ヴィジャーは彼の友好協会のプロジェクトの内容をまくしたてた。次に、KJFSのドネーション20万円の使い道に話が移り、ケアプラスという団体で、貧困癌患者の子供に奨学資材を贈与したいという提案があった。その内容はA) 子供たちの名前のレストラン、B) レシートの発行、C) ミニストリー（大臣）に紹介、D) 日本の学生がケーララの学生にお金を援助したという新聞の記事の掲載、以上を含む何らかの証明書・証拠事実を受け取ることを逆提案した。ヴィジャーはこれを了承した。

23時をすぎたから、島岡の部屋でミーティングを開催。そこへふみさんが現れた。彼女は1万ルピーを島岡に貸与した。そっくり1万ルピーにして返済することを約束した。

ふみさんを含めてミーティングが続けられた。

A) 業務連絡、B) 今日の感想と反省、C) 上記のヴィジャーの提案に対する回答、D) ケーララの友好協会との今後の関係について話し合った。この中で、ケアプラスの貧困学生へ寄金することを了承した。また当地の友好協会との今後の関係はテンポラリーなものにすることした。

23時40分、散会した。

9月17日

9. 3 4 起床して10時に朝食をとりに行った。すでに他のものが朝食を終えていた。島岡が朝食をしている間に、佐藤、谷本両氏を招いて、プラスケアという団体の内容説明をした。これは今朝早く、昨日ヴィジャーからもらった文書から学習したことをかいつまんで話をした。その内容は期待以上に具体的で貧困学生にきめ細かい配慮の行き届いたものだった。このことによって我々はいよいよ、この寄金の確信を深めることになった。

11時から、almini（学友会）や日本語—マラヤム語交流学习責任者やケアプラスのメンバー、そして政府の開発研究課のセクレタリー夫妻など実に様々なケーララ人が集まってきた。カオスに似た状態で、日本—ケーララ友好団体の協力をどのようにするかをときれとぎれに行われた。

13時過ぎにonamのいわば正月料理を大勢で食べた。どれも美味だった。その後、14時過ぎに屋上で記念撮影をした後で、やっと本題の協力関係の話が始まった。結局、われわれは寄付金を届けに来た以外にはなんら目的をもっていないのであって、メンバーも数人のきわめて限られたものにすぎないことを述べ、むしろ当地の友好協会が我々に何を期待するかを聞きたいということを書いた。

クマール氏は、彼らのプロジェクトの範囲は産業技術移転だけではなく、相互ベースで様々な交流（文化や民芸品なども含めて）をカバーしていることを説明した。その点で彼らの目的をアプリシエイトすることを述べた。

しかし、個人的に、島岡は来年3月で定年を迎えるので、名誉教授のタイトルは維持しつつも、一面世俗的な「力」を失うけど他面より自由な身分としてフリーランスの著述家になれることと、個人的にNPOをスタートさせる。その中のプロジェクトに、開発教育、開発経済学、出版（社会的弱者の声の発表）そしてスタディ・ツアーのブランチ（支部）を作ろうと思うし、すでに何人かの出資者がいる。そうなった場合、我々はより緊密な交流を図ることができるだろう、と述べた。

結論として、今後様々な意見交流と情報交流を継続し、島岡の定年退職後に具体的なプロジェクトを決めていくことになった。当地の友好協会の期待は21日に再会するときにある程度、固めておく、ということになった。

15時ごろ、お絵かきの教室をやっている寺院に、絵の具等の寄付をするに値するか否かを下見するために、島岡と若者組がタクシーで出かけた。途中、あるジャンクションで、絵描きの中野さん（女性）と合流するためにしばらく停車していた。このときにまりえはパン・ケーキの買い物をした。

中野さんとあるインド人女性とが車で現れ、一緒に山の上の寺院に向かった。その寺院の祭壇にいと、黄色の衣を着た僧侶がやってきて、予定外の説明と寺院の案内をしてくれた。ちょうど夕日が沈む頃、はるか地平線に、その向こうはアラビア海が控えているが、沈んでいくのを見渡すことができた。僧侶はお茶かコーヒーかを飲むかと尋ねるので、島岡らは断ったのだが、RIKOだけは茶を飲みたいといった。敷地を散策するところから寺院に帰ると、食堂に全員の金属製コップが並べられている。そこにバナナの葉の皿が各自に置いてある。やがて上半身裸の修行僧が熱い白い液体が注がれた。これは何か？と訪ねたらミルクを入れたお湯である。その後でティーバッグが配られた。そしてそのバナナの葉の皿に4種類のケーキとバナナが2個ずつ配られた。

それを平らげて終わりかと思ったら、RIKOが自分の専門とケーララに来た目的を話した。僧侶は歩きながら、RIKOに教育について語った。

「ケーララで識字率がきわめて高いと政府が言うが、就学率についていっているものであって、4年間修学したら文字を知っているというように統計処理をしているにすぎない。じっさいには、長欠児童がいたり、通学していても文字を覚えていない児童もいる。自分たちは教育のプロジ

ェクトも実行しているのだから、時間があればもう一度来訪してくればその実態を見せる」と言う。

「教育は字を覚えるとか計算や知識を身につけることも大切なことであるが、それは競争原理で行われている現状でもあり、必ずしもそれが教育と言うわけではない。教育は精神 spirit の成長がはかられるべきなのだ。教育は読み書き計算や多くのものを獲得する技術を覚えることに終始しているが、それはお金と結びついている。メンタルな面を大切に、スピリチュアルなレベルにまで高めるのでなければならない。」

「メンタルとスピリチュアルとはどう違うかという、とても難しい質問だが、物質は、これは私の物だということができる。心（マインド）も私の心ということができる。知識はなかなか私の知識ということは難しいが、しかしある程度知識も私の知識ではということもできる。すべて私のものということができるが、あらゆる私のというものをそぎ落としたステージに精神がある。動物は必要な物を食べたら、それで事足りる。動物は自ずから精神世界に到達できている。そのステージに自然に到達している。ところが人間はどうか？あらゆる物は私の物と言いたがるし、さらにさらに我欲・我執にとらわれている。今の教育はそのようなシステムになっている。しかし、その我執を取り除くことが教育の本当のあり方なのだ。たとえば、虎が赤ちゃんを食べようとしているときに、母親は虎と赤ちゃんの間に入って自分が赤ちゃんに食べられるように振る舞う。これが精神のあり方なのだ」

日は暮れて、あたりはいつしか真っ暗になっていた。蚊の群衆が島岡を除くすべての人に襲いかかった。

もっと僧侶の話を聞きたかったのだが、時間と蚊の来襲とによって退散した。

ホテルの島岡の部屋で、町で買って来たケーキとパンで夕食をとっているときに、マダムたちがやってきて、ミーティングが始まった。若者組は寺院の僧侶の話が興味深いと言った。マダムは町の様子を語った。9時半に散会した。

若者組は22時から屋上で歌と踊りの練習をするというので、島岡は屋上のレストランにいてアイスクリームを注文した。そして「世界に一つだけの花」「故郷」「花」などを良太のウクレレとまりえのリコーダーによって練習した。11時に散会した。

9月18日

7.00 インドプリ・ホテルの玄関ロビーに待ち合わせ。新しい別の運転手と会い、ハイヤーの車に乗り込む。アレピーに向かう。午前10時頃に到着。途中車の中で昨日買ったパンなどをかじる。街の中はどこもオナムの祝祭でにぎわっていた。

アレピーのバックウォーターの波止場に多くのバンブー・ボート（竹製の屋形船）が停泊している。ふみさんとその世話になっている3人若者（男性）はまだ来ていなかったが、運転手が携帯で連絡をとって、われわれが借り切るバンブー・ボートに先に乗り込んで、休息をとって待つことにした。バンブー・ボートは、ツインの寝室が二つ、それぞれにシャワーとトイレがある。甲板（バンブーの屋根付き）で椅子が20ぐらいあり、思い思いに座って休める。寝室で横になって仮眠をとることもできる。やがて12時半頃ふみさん一行（4人）がハイヤーで到着する。道が混んでいてのろのろ運転で遅くなったとのこと。

アレピーのバックウォーターの中を緩やかに、合計11人の日本人が周航した。途中どこかの停泊地で、昼食が出て、立食で様々なケララ料理を楽しんだ。一部ビールも飲んだものもいる。直孝がいきなりふつうの服装のままバックウォーターに飛び込み泳ぎ始めた。他の男性の若者はすべて泳いだ。しかし、ふみさんグループの一人が全裸で泳いだときに、船員がやってきて、この水で生活している人々がおろし、神聖な水なので、なにか身にまとえ、と言った。彼は船員にバスタオルを借りて腰に巻いた。日本でもかなりエチケットに反する行為ではあつ

たが、うかつだった。

さらに船は狭い運河を進み夕方近く、ある停泊地に着いた。そこで下船した。11人で飲食こみこみでおよそ25000ルピーだった。

2台のハイヤーが先回りをしてわれわれを待っていてくれた。ここからテカディに向かった。途中、川で多人数の漕ぎ手が乗る船の競艇があったので、それを眺めたが時間の関係で一部しかみられず、車にもどり、山岳地帯に入った。カーブと悪路と長時間揺られ揺られして東の方向に走り続けた。途中コッチャムという高級住宅街を通過した。我々の車にはまりえと良太とが掛け合い漫才を始めそれで大笑いしていた。しかし、直孝と谷本さんが車酔いでダウンしていて、寡黙になっていた。

ようやく8時過ぎにアユルベータなどの保養施設のあるテカディに着いた。ここの経営者たちに様々な不幸と病気があって、少数の人しか会えなかった。遅い夕食が始まった。素朴なしかし豊富な夕食で、島岡はどれも美味しく楽しんだ。

その後、島岡の寝室（ツインルームで一人）に11人全員集まってミーティングが始まったが、疲れているのでRIKOの事務連絡だけで散会しようとしたが、RIKOがこちらの施設の人々に捕まって、なかなかやってこない。しようこともなく話をしていた。

やがてRIKOとふみさんが来て、車酔いで倒れている谷本さんを除く全員がそろい、これからの予定の打ち合わせを行って散会した。

そのあと我々一行の4人の若者とぼくとで芸の練習が始まった。そこにふみさんとRIKOが呼ばれて出て行ったが、やがて島岡もよばれ、この施設の責任者でピーアメイド開発協会の神父カリアップラムと面会した。島岡はケララと日本の関係を深めたいことを話すと、今後e-mailなどを通じて話し合いを持とうということになった。

やがてこの面会も終わり、また若者組の芸の練習に参加し、トライバル・ピープルの子供たちの前で芸のプログラムを決めて散会、と思われたが、島岡が船上でまりえに教えたトランプの二人ブリッジで、まりえが良太に負けたリベンジをしようと言いだし、それに復活した直孝が加わり四つ巴の二人ブリッジの乱戦になり、延々午前1時まで続いた。

そうしてやっと散会した。

なおお茶と土地の薬草の工場は、人々に不幸があり、当面営業していないとのことで建物だけを見学するという事になった。

9月18日

<この一日はあえて記録せず>

9月19日

8時にサブ・インスペクター（警部補）が来るという約束だったが、RIKOと島岡はロビーで待っているけど、結局姿を見せなかった。犯人の妻がロビーに娘（1歳）とともに玄関ロビーに姿を見せたが「シカト」して通り過ぎた。結局、出発時刻、10時30分までには誰も現れなかった。

島岡は警察との仲介役を引き受けてくれたホテルのオーナーの息子（単に息子という）の執務室に行って、先ほど彼が島岡に近づいてきて話したことの確認を行った。

「我々は、昨夜話し合った。我々は寛容になろうと。被害者本人は言っている。犯人を罰するのであって、犯人の家族まで罰したくはない。幸せな家庭まで破壊するとすれば、そのことの罪の意識が大きくなるだろう。またすべてただちに忘れて楽しい旅を続けたい。泣きながらそのように訴えた。そこで我々は犯人に明確な心からの謝罪文だけを要求する。日本には仏教から来た諺だろうが、罪を憎んで人を憎まず condemn the offense but not the offender. という諺がある。島岡の日本の住所を書くので、ここに犯人の心からの謝罪文を送ってくれ」

息子は快く引き受け、約束した。島岡は息子の仲介の労をねぎらい、謝意を表して車に乗り込んだ。

島岡がこのようなことをしている間に、佐藤さんに土産物屋に行っていて、当地では比較的高価な男性2人、女性3人の土産物を買ってきてもらった。約8000R。

イデキのヒロミホームに着いた。シスターとファザーが出迎え、大勢の子供たちも集まってきた。若干の食事をした。その後、ヒロミホームが美しく拡大され、建物を接して協会が建てられていた。その渡り廊下のような中間部分に美しいタイルが貼られたプレイルームが作られていて、雨の日に子供が遊べるようになっていた。

子供たちの多くは学校に行っていて不在だった。従って修学前の幼児だけが歓迎してくれた。ホールで歌とダンスが行われ、我々もウクレレとリコーダーで「故郷」と「世界の・・・」を振り付けで歌って返礼した。その上、直孝がくだらないバラを出すマジック、RIKOの玉出しマジック、まりえのマジック・バルーンを演じた。

まりえのマジック・バルーンは爆発的にヒットし、子供たちは大騒ぎとなった。そして母親までそのバルーンを持ち歩いて走り回っていた。

この後、PDSのトライバルピープルの施設に行き、ここでも子供たちの大歓迎を受けた。彼らのマス・ダンスを二つ堪能した。ぼくらは時間の関係で、まりえのマジックバルーンと故郷を歌っただけだった。ここでいただいた遅い昼食がおいしかった。

ビショップの教会堂に着いた。ここで障害児施設の子らと会った。彼らは歌を歌い、そのうちの一人の少女（13歳にも関わらず1mあるかないか）が踊りを舞った。故郷を歌って答礼をした。この後ビショップとの会見をした。ビショップは島岡に、彼が建てた二つのコリッジ（工科と文科）で、教授をしないか？と行っていた。島岡の退職後の計画を具体的に煮詰めて、アイディアを交換しようと言うことになった。

この後、道すがらエンジニアリング・コリッジ（工科大学）に行った。ファザー（後でパンフレットで知ったのだが、この方が一番偉い教授だった）が小走りに学内や教室に案内してくれた。そして教室に入ると学生は一斉に起立して我々を迎えてくれた。しかし、ともかく時間が無い。学長室に入るや、ココナツのジュースやら何やらが出てきた。いつしかCDS（開発研究センター）の男性も来ていた。そしてそそくさとそこを後にした。

帰りの道すがら、CDSの男性の兄の家があるという。道路に家族全員が立って出迎えているので、会ってくれと言う。事実道路端で数人の子供や男性女性が立っていた。そこで下車して、島岡などを紹介してくれて握手して、名刺を渡して、そしてすぐに立ち去った。

その後、5時間の車のツアーになり、20時過ぎに、ホテルに到着。9時半に食事。やがてRIKOがふみさん一行の車に乗っていたので、遅れてやってきて夕食に合流。

食後、簡単に今後の打ち合わせ。そして12時に散会した。

9月21日

早朝、クマール（当地の友好協会理事長）氏に電話して、昨日750000ルピーを贈呈すると言ったが、それはとんでもない間違いで、8万ルピーである旨伝えようとした。電話をか

けたが、娘さんが出てきて折り返し電話をするという。しかし、待てど、電話がない。そこへふみさんが現れて、5000ルピーを作ってもってきてくれた。これで合計8万ルピーとなった。

ところが、そろそろ出かけようとしていると、RIKOが「もうだめです。すべて参加できません」と言いに来た。抗生物質を与えて休ませることになった。また直孝もダウンしたとのこと。従って残る5人で、地域がんセンター（RCC）に、クマール氏とともに向かった。

がんセンターではすでにメディアが2社来ていて、我々の入場の写真を撮り始めた。案内されて入った大きなホールにはすでに舞台が作られていて歓迎の幕が張られ、片隅に演説用のマイクの机が置いてあった。100人ほどの癌患者（治療済み）、両親の一人または二人を癌で失った子供たち（5歳から大学院生まで）、そして病院、ケアプラスなどの幹部がそろった。そして島岡を中心に壇上に関係機関のプレジデント・クラスの人々が並び、演説を始めた。

島岡もまた演説を要求された。なんら原稿がなかった。心の用意もなかった。しかし、島岡は次のように演説をした。

“心温まる紳士たちのスピーチをありがとうございます。淑女・紳士の皆さん、そしてこうして集まってきてくれた、大人の男女、また子供たち、関係者の歓迎に心から感謝する。必ずしも豊かではない日本の学生や友人が、協会を設立して、津波被害者を救おうとした結果、集まったお金を持ってきた。しかし、ケーララでは津波被害はタミール・ナドゥ（ケーララの隣の州、インド洋に面している）と比較して軽微であると知って、心が変わり、ケーララの子供たちを助けたいと思って、助ける先を探すためにケーララにやってきた。ケーララに着いたら、友人のヴィジャーが、ケアプラスの存在を教えてくれたので、検討の結果、我々はこのケアプラスにお金を寄贈することにした。我々は必ずしも豊かな日本人ではない。従ってかなり少額ではあるが、受け取ってもらいたい。我々はこれからもケーララと日本との友好関係を、人間的かつ相互的な基盤の上で促進したいと思っているものである。もう一度、ありがとうございます。（合掌して）ナンニィ

なお、私の着ている着物は日本の伝統的な衣装であって、日本人の多くはもう着なくなっているものだ。私はこの着物を着て講義している。私以外にこのような教授はいない。とても珍しい衣装だ。ちょうど黒沢明の映画のサムライのような姿だと思う。ありがとう“

この後、再び若干の人々の短いスピーチが続き、贈呈式に移った。島岡が「おい、絵になるから上がれ」と壇上に呼び上げて、まりえと良太の二人がそろって札束の分厚い包みを取り出して、ケアプラスのプレジデントに手渡した。このときその札束のボリュームに会場は息を飲んだかのようなようだった。

この儀式が終了したら、病院のナースまたはドクターが次々に子供たちを紹介してくれた。それは漁民の子供（癌でなくなった親がいるし、津波の被害を受けたものだろう）たち、学校を卒業して働いている子供たち、トライバル・ピープルの子供たち、学業成績優秀な子供たちなどなど、大勢の子供たちが紹介された。昼食のために会場を後にしつつ、多くの子供たちと握手を交わした。

我々5人には椅子とテーブルがしつらえてあって、ケーララ料理を食べた。この時にまりえがほとんどダウン寸前だと言うことがわかった。後で知ったのだが、良太も同様だったとのこと。

食後、クマールの案内で、佐藤さんと谷本さんをホテルに降ろし、しばらく休んで、17時頃、クマールが車で迎えに来た。そこからパダマクマール氏が待っている政府の美しいオフィスに行った。そこで、島岡とその協会とケーララの政府やケーララの政府系の企業との関係をどうするかという話になった。島岡がケーララに関してどのような活動が可能か？ケーララ友好協会を存続するのか？そのような話になった。そこでビショップがマリアン・コリッジで仕事をしてみないかという話をしている、島岡の今後の計画が煮詰まり次第、e-mailによって話し合っ行って、ということになっているという、パダマクマールは島岡の経済学はどんな経済学かと訪ねたので、「逆倒＝人間関係力アプローチ」概要を話した。ついで、現在執筆している著作のことで、関係力アプローチについては、水平的なネットワークと垂直的なアドヴォカシーの構想、方法的にはあらゆる科学＝自然科学や社会科学を統合して同一の方法論で議論できること、などを話した。また日本には社会学の考え方で、内発的発展論というものがある、ケーララで実行されている土着の素材と人材による産業興しをも内包する考え方、そしてまた人間関係力の考え方は、A・センのケイパビリティズ・アプローチとも関係すること、逆倒アプローチは東から西を、南から北を、女から男を見る見方であること、などなどを語った。教育の方法も独特で、島岡はIT機器を利用して経済学教育をやってきた先駆者であり権威者であると信ずることも付け加えた。

パダマクマールは、そのような経済学こそケーララには必要であり、島岡の計画は退職後ではなくて、在職中にもたてられるものであって、今後緊密に連絡を取り合おう、もし我々のできることであれば、直ちに連絡してくれ、アレンジをしよう、という結論になった。RIKOの教育の研究はただコンピュータから打ち出すプリントと統計書をコピーすることに止まった。

クマールの手配する車でホテル（インドプリ、ベーカリー・ジャンクションの近く）に3人は送られてきた。

佐藤さんを除く全員がダウンしてしまった。しかし、ふみさんが日本料理を作って待っている、RIKOと谷本さんをホテルに置いたまま、ふみさん宅にオートで行った。オートの運転手とけんかになったが一応、倍額以上支払って握手して別れた。

ふみさんは煮魚と二種類の野菜炒めを手早く作ってくれて、白飯とみそ汁で食事をごちそうになった。島岡は二人分食べたが、良太はがんばってたくさん食べたものの、その他のものはほとんど手をつけなかった。

島岡は今日のいきさつを話をした。ふみさんは、RIKOがルートを切り開いた上に乗ってとても予想以上の成果が得られたことを喜んでた。たしかに、RIKOとふみさんが切り開いたレールの上を新幹線が走るような勢いで、物事がどんどん運ばれていく。インド人の日本への期待の大きさをひしひしと感じ取った。

ふみさんの家から藤沢さんという彫刻家が、伝統芸術としての彫刻をどのように伝えるか？どのようにビジネスするか？ということに関心があり、現在ケーララで養成所を建築している最中だ、一度会って話してみないか？ということだった。スケジュール管理をしているものが、ダウンしているので、スケジュールを決定次第、お会いしたい旨伝えた。

ふみさんの車に5人乗せてもらって、ホテルに帰った。

R I K Oの部屋で、明日のスケジュールを確認したので、藤沢さんとは明日の夜会うことにしようと思っている。

9月21日

9月22日

jayantiから電話があるかもしれない。→23日の18時30分頃、彼女はホテルに会いに来ることになった。

朝食を摂るためにレストランに降りていくと、ウェイターがマラヤラム語の新聞をもってきて、「ここにあなたの写真が載っています」と言った。見るとカラー写真だった。ヒンズー紙には、昨日ファンクションの予告記事がかなり大きく報道してくれたにもかかわらず、じっさいの記事がなかった。しかし、ニュー・インディアン・エクスプレス紙（英字）には、モノカラーの写真入りで報道されていた。島岡はマラヤラム語をまったく読めない。どこに島岡光一の名前があるか？と尋ねると、ある行にアンダーラインを引いてくれた。

車は一日ハイヤーした。運転手は巨漢で怖い顔をしていた。当初、無愛想で難物かな？という印象を受けたが、道に地域の（トリバンドラム市議会議員）選挙運動のパレードや楽隊や演説が行われていて、車は時間を食った。そのことで、彼は「今日で、選挙のアナウンスは終わる。」「やかましいアナウンスがね？」「（笑って）そうそう」「明日から静かなケーララが戻ってくるんだね」「いやいや、ケーララはいつでもやかましい」「ははは。こんどの選挙はどちらが勝つだろうか」「五年ごとに政権が交代しているから今度は共産党が勝に決まっている」「それは決定的なことか」「そうだ」「じゃあ、なぜ कांग्रेसは選挙を戦っているのか？」「いや。おれは共産党が勝つと確信しているし、ケーララは共産党が大好きだ」「きみもね？」「もちろん」  
島岡は大笑いをしてしまった。

11時頃、ケーララ大学経済学部長のB. A. プラカッシュに会いに行った。随行者は直孝、良太、まりえと島岡だった。学部長室で彼が編集する『ケーララの経済開発』という本の第2版が2004年に出ていることを教えられた。島岡が2週間前に書いた手紙が届いていないということだった。若干の討論の後、会議室に向かった。10人ほどの男女学生が入ってきた。自己紹介の後、学生との交流会になった。

R I K Oが配って回収するはずのアンケートをまりえが代わって行った。

交歓会は案外に時間がかかり、昼食抜きで、CDSに向かった。ここでゴピナサンというCDSの名誉研究員と面会した。彼は、まずケーララモデルなど存在しないと明言した。ケーララは三つの部分に分けられるとした上で、ケーララの近現代史を19世紀から20世紀90年代に至るまで語ってくれた。とりわけ戦後の独立運動から農地改革の話に多くの時間が割かれた。57年の共産党政権はそれまでの改革運動をよりいっそうラジカルなものにした。農地改革が地域によって落差があったが、共産党政権において、それがより徹底し広範化した。教育とヘルスケアの問題にも詳しくふれられた。

この途中で、ふみさんが現れた。彼女は話がわからなかったらしく、居眠りなどしていたが、

そのうち私立学校と公立学校との教員の質とは何かという話の中で、島岡に、教員になるには袖の下を使う必要があるかと尋ねてくれと言った。通訳してやったら、ゴピナサンはニヤニヤしながら、もちろんその必要がある。すべての人ではないが、大部分の人が「ギフト」を使って教員になっていく。その額は30万円程度だ。きわめて驚いた。学生たちは「日本ではありえない」と言った。約90分後の最後に、彼は島岡に「なぜマルクス主義からシフトしたのか？マルクス主義にどのような問題があるか？」と尋ねた。島岡は、身を乗り出して話し始めたら、それを遮って、ゴピナサンは「お茶を飲まないか」と言うので、我々は要らないと言ったけど、彼は「おれがほしいのだ」というので、それなら一緒にしよう、ということになった。廊下の隅にコーヒーの容器があってそれを女性がひねってコーヒーを煎れてくれた。飲み終わった段階で、時間もきたので、これで帰ることにした。そしてお別れの挨拶をする中で、島岡は来年も来るという話をすると、ゴピナサンは「なぜマルクス主義からシフトしたかについて話そう」と言うので、快諾した。

ふみさんの車とともにいったんホテルに帰り、ホテルに居残りのRIKO、マダム二人の意向を受けて、ふみさん行きつけの両替商のところに向かった。そこで20万円ふみさんに返して残る1万ルピー相当と先にふみさんから借りていた1万相当分と合わせて2万ルピー相当のドル建てのトラベラーズチェックをルピーに換えてすべて返済した。これをもってKJFSの寄金の事業はすべて完了した。

この両替商の同じビルに大きな本屋があって、B. A. プラカッシュの新版の本を購入した。

この両替商の店に入るやいなや、その店員がマラヤラム語の新聞を持ってきて、我々のカメラ写真入りの記事を指さして、この人々だろうかと尋ねた。学生たちはそのマラヤラム語の新聞を見ていなかったらしく、驚いてその新聞が欲しいと言った。それでまりえが隣の新聞売り場に行って、全員の分を買い込んできた。

食事は食べられる人食べられない人様々なので、各自で勝手にレストランあるいはルームサービスで摂ることになっている。一人での夕食後、23日の予定を学生たちに確認したら、何もない、という返事だったので、彫刻家藤沢さんとコンタクトをとって、明朝10時半、SMSMインスティテュート（公営の土産物屋）で待ち合わせて、タクシーを拾って彼が彫刻職人学校を建築しているところを訪ねることにした。その途中、伝統的な彫刻（木彫）をやっているちっぽけな工房を訪問することにした。そして同じSMSMインスティテュートの近くで昼食を摂ることになった。

藤沢さんの電話：モバイル・9349862749 固定電話：3956142

ほぼ同じ時間に、jayantiから電話があって、同じく明日の18時30分にホテルのレストランで会うことになった。

20時半頃から、島岡の部屋で久しぶりのミーティングを開いた。佐藤さんを除くほぼ全員が元気を回復したとのこと。RIKOから明日の予定を聞くと、午後に、ダンスを観ることにしているが、確実な予約が取れていないという。また午前、両マダムとRIKOはマリア・テレサの教会とかを訪問するという。ホテルの残留組が勝手に決めた行事は関知しないのだが、ダンスについては事前に聞いていた。だからこそ、学生に明日の予定を聞くと、フリーだというから、ダンスは中止になったのだなと思い、自分はアポをとってしまった。RIKOは不満そうだった。

その後、今日の出来事をこもごも報告し合って、散会した。佐藤さんがまだ気分が優れないようなので、早々と自分の部屋に引っ込んだ。

9月23日

10時半に、まりえと良太と一緒に、SMSMSインスティテュートにオートで向かった。20Rを要求されたが、15に値切った上で、16払ってやるとドライバーはうれしそうにしていた。

藤沢さんに会った。藤沢さんの言うところによれば、訪ねるはずの工房が選挙ホリディのため閉まっているという。仕方がないので、タクシーで10キロ離れた。アーティスト・インスティテュートの建築現場を見学にでかけた。

藤沢さんがタクシーのドライバーと長い間交渉していて、往復350Rだという。代ってぼくがドライバーに、300RでOKだろう？と言うと、あっさり、OKと言った。藤沢さんが20年間ケーララに関わってきたというが、いったいどのような暮らし方をしていたのだろうか？とってしまった。

これも選挙ホリディとかで働いている人は少なかった。オフィス、工房、ホール、アコモデーション、自宅と細長いが非常に広大な敷地に様々な施設が作られている。完成した姿を想像することはできなかったが、うまく行くといいなあと感じないわけにはいかなかった。

このインスティテュートの経営主体はトラストで、ここでは5人までのトラスティーによって所有される（なおソサイエティの形にすると人数をたくさん募らなければならない）。資金は全額藤沢さんが出している。その総額は2000万円。この2000万円は親族の遺産であるという。ケーララで外国人がトラストを始めることについて以前は禁止されていたが、その後規制緩和されたにもかかわらず、その事実を役人が知らなかったので、許可が下りるのに時間がかかった。トラスティーの一人だろうと思われるインド人もやってきて挨拶をした。隣の敷地が椰子の実畑で、人々が木登りをして椰子の実をしきりにたたき落としている。このインド人が、帰る時に、椰子のジュースをごちそうしてくれた。島岡の椰子のジュースは甘くて格別美味しかった。まりえは苦手なようだったが、まずい椰子の実だったのかもしれない。

SMSMに帰ってきて、近くのKALAVARAという小さいが上品なレストランに入って、学生と藤沢さんと4人で昼食をとった。島岡はチキンのチリー・サワースープをとって見たが、これがうまかった。辛いのはじめは喉に来るが、そのうちなれてきてうまかった。昼は麺類と決めているので、野菜焼きそばをとった。

ジャヤンティと島岡との間に誤解があって、ジャヤンティは24日の夕方と勘違いしていたとのことで、何回も電話連絡をしたが、オフィスの固定電話もモバイルも通じなかった。ふみさんに改めて、モバイルの電話番号を確かめたら、こちらの間違いだったことがわかったが、彼女には通じなかった。そこでオペレーターに頼んでコールバックのメッセージを送ったら16時頃、ジャヤンティが電話をくれた。そして23日の19:15にホテルのレストランで落ち合うことになった。

RIKOとマダムたちと直孝がマザーテレサの教会に行っていて、ホテルに帰ってきた。RIKOは元気を回復したようで、本日のダンス鑑賞はインドラプリの屋上レストランで20時半から行うことになったというので、すべてはうまく収まった。

夕方、島岡を除くマダム、学生たちはコッパラムビーチに夕日を観に行った。

Memo: we weave warp & woof into web.

島岡は、時間通りにジャヤンティがレセプションに来た。やや小太りの笑顔が可愛い女性だった。35歳で独身だと言うことだった。じきに食堂に降りていって、テーブルを囲んだ。コーヒーを二つ注文して、トークが始まった。彼女は日本での英語の教員の仕事を探している。英語教師はひしめいているのでパートタイムの仕事ぐらいしかないだろうとあらかじめ言っておいた。たしかに彼女の英語は訛りが少なく、ノーマルに近いと思った。ついで、彼女の専門を聞いた。それはアメリカ原住民の文学者に関する研究をしているということだった。そのことは島岡の興味を強くひいた。

島岡は自分の経済学の特徴を話した。そのとき島岡はかつてマルキストだったと言った。その辺りから話が弾み始めた。彼女もかつてはマルキストだったが、今はヘーゲリアンであると言った。ヘーゲルは観念論者だよという、そうだけど弁証法を信じていると彼女は言う。ぼくは弁証法を信じないと言った。そしてその訳も話をした。ジャヤンティはヘーゲリアンと言っても、私はフィーリングでそう言うのであるだけで、正確に理解しているわけではないと答えた。フィーリングならばぼくはフォイエルバッハ主義者だ。愛の宗教を信じていると言った。彼女はかつてシェイクスピアが好きだったと言った。それなら島岡もシェイクスピアを研究していた。そもそもぼくはウォーリック大学で研究していたのは、シェイクスピアの生地のレストランフォード・アポン・エイボンに近かったからだ、と言った。彼女はシェイクスピアのジュリアス・シーザーは会社などの経営に大きな意味があると言った。ぼくは驚いて、それは知らなかった。将来考えてみると言った。などなど談論風発で次から次へと話が弾み、まりえの得意技「マシンガン・トーク」を1時間15分にわたって繰り広げた。

元来、ケーララに来て、日本人学生にもわかるようにゆっくり英語で話をしてきたのだが、フェイス・トゥ・フェイス（2人のトイ面）の話では、そのような顧慮を払わなくていいので、「マシンガン・トーク」をすっかりエンジョイした。しかも彼女の英語はわかりやすかったこともあった。やがてふみさんが入ってきて、みんながそろったが、テイクアウェイのファーストフードを部屋で食べるので、ごゆっくりという。ジャヤンティはふみさんが勤める同じ会社に勤めているから、ふみさんから紹介された女性なのだ。

ジャヤンティは、プロフィールを書いたe-mailを島岡にしてくれることを堅く約束して、別れた。

21時を大きく回ったころ、屋上レストランに行くと、ふみさんとふみさんの日本語の弟子たちが集まっていた。

このダンスは、RIKOとふみさんがケーララ大学の学生部長、ボス教授に依頼して我々用に特別にアレンジしてくれたものだ。

ダンサーは、ケーララ大学の経営学を研究する傍ら、南インドの舞踊を研究しているアニータ(?)で、すでにテレビに毎日のように出演している女優でもある。また一人はまだ女子高校生だ。二人とも美形でキュートだった。踊り自体は、リズムカルで激しく、かつ優雅なもので、本場のダンスを観た、という感じだった。彼女たちは古典的なダンスと現代ダンスと合計4曲のダンスを披露してくれた。感激ものだった。

ダンスが終わったら、クマールから電話があった。先日のファンクションはどう感じたか?新聞を見たか?写真が欲しいか?などの矢継ぎ早の質問に追われた。もちろん彼のわれわれへの親切に深く感謝し、写真ももらいたい旨伝えたら、なんとか明日までアレンジしてみると答えてくれた。

もどってみると、ダンサーを囲む集合写真の撮影は終わっていた。しかし、ダンサーたちにじかに感謝の言葉をかけてもらいたいと言われたので、若い二人に感想を述べ、深く感謝した。そして二人の美しいダンサーを両脇に抱えて、記念撮影を行った。

この後、参集者が思い思いに輪を作って歓談した。ぼくはプラヴィーン・ヴォスデヴォンと対談の形になった。彼とぼくの経済学の概要を話した。とくにコミュニティマネーや「講」について話をすると、ケーララにもきわめて小規模ながら存在するとのことだった。かれは島岡のような経済学者こそケーララに必要だと強調した。かれは少しだけ日本語が話せるが、トークそのものはマシガン英語で行われた。その上で、ぼくをみんなよりも少し離れたところに誘って、彼の日本に関する心配を話した。その要点は、一つは自分もマルクス主義に疑問をもっており、また共産党にも全面的に賛成できない。マルクス主義はごく限られた上部のインテリジェンスのある人々の間だけに普及しているのもあって、下層階級はそれにはまったく無縁だ。これはマルクス主義としては正常なあり方ではない。もう一つは、彼は日本の現状に大変心配している。日本人はアメリカによる原爆投下による広島・長崎の惨禍の上に、きわめて勤勉に働いた。日本は偉大で尊敬するが、それはアメリカからの施しもので、そうなったのだから、今の日本人は、とくに日本の若者はそれに甘やかされて、毒されている。自分(プラヴィーン)は、ケーララの工業化を望まない。それは日本の二の舞になるからだ。我々は英米帝国主義と闘ってきた歴史をもっている。決して施しものを受けていない。だから貧困なのだ。などいっそうマシガン・トークになった。かれの懸念はまったく正当であり、まったく異論がない。我々はさらに意見交換をしなければならぬことを確認し合った。彼自身は1歳の子供がおり、必ずしも自由にはならないが、2年後には家族とともにマンチェスター大学に行って勉強したいと言った。ぼくもマンチェスター大学にいたことがあり、あそこは思い出深いところだというと、彼はとても驚き喜んでくれた。長いトークも23時になり、終わらなければならなかった。次にこちらに来たら必ず連絡してくれと何度も念を押された。そして別れを告げた。

時間も遅くなったが、打ち合わせということで島岡の部屋に全員参集した。全員元気を回復していた。よかった!!!!RIKOが、明日のスケジュールを簡潔に述べた。学生たちはアユルベータを、RIKOとマダムたちはサラ・トーマスに会いに行くことだった。ぼくは一人部屋で休息をとることにした。

その後、なんとなく今日の思い出話となった。藤沢さんのインスティテュートの建築現場に

行ったグループの報告。マザーテレサ関連の教会に行ったグループの話をもも聞いた。教会に行ったグループでは、多美子さんが生き生きとした表情になり、涙ぐむ場面もあって、とても興奮していた。またふみさんが多美子さんにケーララに来て住まないか？と何度もオファーしたとのことだが、多美子さんは韓国に興味があり、もう一度インドに来るかどうか二の足を踏んでいることを話した。彼女は英語に自信がないとも言った。ホテルの最後の晩だったのでどことなく別れがたい雰囲気があったが、明日の晩、ふみさんがホテルのレストランに来て会食でもてなすことにした。そしてみんなで一本締めをして、ツアーの成功を祝すことにした。

大学1年生の男女二人に、島岡は「とんでもない大学生活の始まりだね」と言ったら、うなずいていた。しかし、何事もこれからこの経験がどのように生かされるかだろう。口先では良太は「安定志向」の公立学校教員を志望しているが、はたしてどれだけ本気なのか不明なところがある。今後の彼の行く末が楽しみであり心配でもある。安定志向の人間に教育などやってもらいたくないからだ。自分の身分の安定を優先し、上の指令のままに行われる教育は価値がないと思われるからだ。

9月24日

島岡は本日ホテルの中に滞在して休息をとるつもりだったが、気が変わって、マダムとRIKOと一緒にサラ・トーマスを訪問することにした。ケアプラスの指導者ショバジョージを始め、サラトーマスとその夫の3人が笑顔で迎えてくれた。質素な玄関から入ってすぐのリビングに座って、話し合った。島岡はカメラマンに徹しようと思ったが、ショバジョージの父親(78)が少し離れて座っていたので、ウーマントークをそのままにして、島岡はその父親の隣に席を移して、話し合った。結果としてマントークとなった。

彼は外科医で現在も毎日手術をしている。主に胃の手術で、心臓や肺、脳はやらない。この間島岡はなかなか自分の拡張型心筋症の英名(dilated cardiomyopathy 今思い出したので遅まきながら書いておく)忘れしていて、一口に言うことができなかったが、症状を説明すると、それは心臓移植以外に直す方法がない、ということを彼は即座に言ったので、助かった。しかし、いまはいいんだろう？というので、もちろんと答えた。あなたが医学上現在当面している最大の問題はなにか？と訪ねると、医療費の高騰だと答えた。注射一本がone lak (10万) Rかかることがある。これはとうてい貧困家庭や政府自身も支えきれものではない。しかしケーララの医療制度は最高レベルだろう？ときくと、その通りだが、公的支援も限界があると答えた。共産党マルクス主義政権で、財政赤字が破産的だと聞くが・・・と言うと、そればかりではなくて、腐敗もある、多くの中間搾取があって、公的支援が100あるとすれば、末端に届くにはその半分ほどになっていることもあるという答えだった。島岡は、そのことはあらかじめ知っていた。だからこそ、我々は直接ここに来て、RIKOを通じて、寄金先を探して信頼すべき人を介してあなたの娘さんの団体ケアプラスを紹介してもらえたのだ、ということ、そのことはよく知っている。娘のケアプラスは100パーセント信頼できる団体だ。すべてのお金は直接貧困家庭、児童のために使われる。事実自分自身もケアプラスで活動している。我々は、病院で癌患者が来るのを待つのではなくて、ナース、ソーシャルワーカーとともにチームを組んで直接家庭訪問をして患者の苦痛緩和を支援している。終末期にある癌患者の最大の関心事は子供の教育の継続である。我々はそこに着目している。

さらに話は教育の話になって、ケーララの識字率と英語スピーカーの多さを彼は誇った。しかし、島岡は、それは学卒者の資格者の問題であって、実質的にクオリティの問題になると、

識字率は下がるのではないかと、彼は答えられなかった。無回答の肯定だった。英語の問題では、日本では英語教育は公立学校の中学校から開始されるが、英語帝国主義という言葉があって、英語教育の独占状態は正常だとは必ずしも言えないと思う、我々はもっとマイナーな言語も大事にしないでならず、その点では次第に英語のみならず、マイナーな地域の言語を学ぶ人々が増えている、という、彼は、そのことはよく理解できる、インドではイギリスが英語教育を通じて植民地支配をしていた、そのためにインドでは地方によってまったく異なる言語が話されていたが、英語が共通語となり、英語が話せるようになった、という答えであった。島岡は、しかしながら、あなたの話す英語はわかりやすいが、多くのケーララ人の英語は米英の影響のもとで英語を学んできた我々にはほとんど理解できない、という、彼は、事実そのとおりであって、自分はアメリカ人と話す機会があるが、アメリカ人は自分の言うことをほとんど理解できなかったし、自分もアメリカ人の言うことをほとんど理解できなかった、したがってわれわれ双方とも互いをあたかも子供に話すかのようにゆっくりと単純な言葉と表現で話している。島岡は、英語は、そのことの善し悪しはともかくとして、事実上の世界標準になっていることはよく理解できるので、引き続き英語教育と学習の重要性がある点では彼に同意した。等々。

ショバジョージの父親は、今日は選挙の投票日で休みのはずだが、病院に勤務のために行かなければならない、と言って立ち上がった。島岡は、多忙にもかかわらず長時間貴重な意見をいただいて、心から感謝している、またいつか機会があれば会いたいものだとの感謝の意を伝えた。彼はいつまでも手を握って別れを惜しんだ。

この後、ウーマントークにちょっと参加したが、島岡はカメラマンとして写真を撮った。みんな記念写真を撮って、待たしているタクシーに乗ってホテルに帰った。

ホテルで4人と昼食をしようとしたら、RIKOを通じてショバジョージの家に、島岡のバッグを置き忘れているという電話があったので、ホテルの車でホテルのドライバーに連れられて再びショバジョージの家を訪れた。彼女が門越しにバッグを渡してくれて、すぐにホテルに戻った。ドライバーに50Rのチップを手渡した。

再びホテルのレストランで4人は食事をした。RIKOは「先生は忘れ過ぎです」と怒っていた。おれは忘れるよりも覚えていることの方が遙かに多いと怒り返してやった。佐藤さんから「こうちゃんは謙虚さが足りない」と怒られた。くだらないジョークを言い合って、各自部屋にもどった。

佐藤さんから今朝の訪問によってやっとおもしろいと思った、と言われて、ある面では失望した。それまで、彼女にはおもしろくない旅だったからだ。が、他の面では彼女は最後に元気を取り戻し、旅の締めくくりをエンジョイしてくれたことなので、うれしいことでもあった。そして彼女がそういうことによってRIKOのアレンジに謝意を表しているのだと感じた。

その後、各自の部屋で休息をとった。島岡は若干の仮眠をとった後で、著作の構想を見直していた。とくにポルトアレグロの件について資料を読み直していた。ポルトアレグロに行って話を聞くルートを探することを考えていたが、今回の著作には間に合わないと思った。

18時30分、2500Rほどの追加徴収でホテルの精算をすました。

その最中に、ジャヤンティから電話があった。ジャヤンティは昨夜のすばらしい出会いは忘れがたいものであり、またぜひ再会したいものだ、今後e-mailを通じて意見交換をしていきたい、いい旅を祈る、と言ってよこした。

屋上レストランに集まった。ふみさんが来ていた。それぞれ口々にふみさんに感謝の言葉をのべた。ただ良太だけは、感想はない、これからこの経験をどのように生かしていくか？を帰国したらゆっくり考えたい、などと良太らしくない優等生のようなことを言った。島岡はかなり心外だった。感想はないということはないだろう？これからどのように自分のために生かしていくか？などという自分中心主義はないだろう？と言った。ふみさんも、CDSの長老の前で、「シキュアリティのある公立教員になりたい」という言葉を吐くべきではないと叱った。それを受けて、島岡は次の二つの点で良太は批判されるべきだ。一つは、良太はユーモアのセンスがある。しかし、それは同い年のまりえとの間でのジョークのやりとりならば、楽しいものだ。これが初対面の大人との間のジョークのやりとりとなると、あまりにも子供っぽい。その子供っぽいということを実感しないで、自分の友達、あるいはお母さんとやりとりするようなジョーダン、大人を時には怒らせることになる。その子供っぽさが良太には存在する。二つ目には、良太は長老に向かって、恥ずかしげもなく「安定志向」を口にした。もし将来そのまま公立小学校の教員になるならば、子供のこともより自分のことの方を大事にするような教員になることになる。そんな教員など、およそ誰も相手にしない。すべて安全を期すならば、文科省、教育委員会、校長・教頭の言いなりになって、子供のいじめなど、担任の知らないところで行われていることには、「おれは知らなかった」と責任を回避するような教員など何の価値もない。国民はそんなものに税金を支払いたくない。保護者はそのような教員の質を見抜くだろうし、最近の保護者は教員よりも上の教育を受けていることが多いので、手厳しく排斥されるだろう。

R I K Oは、大トリのぼくの前に発言して、マザーテレサの教会やマザーテレサ関連の小説家の家をアレンジしてマダムたちに喜ばれたことはことのほか嬉しかった。このように、自分は言葉の壁を乗り越えて、他国の人々と日本人と結びつけることがいささかでもできたことは、年来の希望していたことなので、満足している。また、このケーララ滞在を通じて一まだ続くのだが一自分はこのままケーララから引けないなと思った。何らかの形で関わっていきたくと話した。

参席者の発言のトリとして、島岡は一言といいながら、多少長い発言をした。その一言というのは、ふみさんとR I K Oさんとに、この実り多いツアーをアレンジしていただいた努力と親切に対して心から感謝の意を表明したいということだ。それに加えて、島岡は、今回は多くのケーララ人から重い宿題を課せられてしまった。このあと、このツアーで心ある親日家のケーララ人の日本人観を披露した。それは昨日の日記にも記したように、プラビーンの日本人観だ。日本人は確かに教育水準が高く勤勉に働いたが、つまるところアメリカのおこぼれをいただいて経済大国になったのだ。ところが今の日本の若者はどうか？ただそれにスポイルされているだけではないか？おれたちは、確かに経済水準は低い。そして工業化以前だ。しかし教育水準が高くヘルスケアもまた高水準でQOLの面ではきわめて高い。この成果はイギリスと戦いアメリカからも施しものを受けないで、自力で勝ち取ってきたものに他ならない。だからケーララ人は自分に誇りを持っているし、プラビーン自身はケーララの工業化は望まない。第1次産業とIT産業を望んでいる。そこに向けて、我々は情熱をかたむけているのだ。とこ

ろが日本の今の若者はどうか？アメリカのおこぼれと親のすねかじりでぬくぬくとしていて、何事もアメリカ基準で他国を観、かつ甘やかされているだけではないかと。この日本人観が当たっているかどうかは各自判断してもらいたい、少なくとも親日家でふみさんのもとで日本語を勉強しているケーララ人が日本人と日本の若者に対してどう思っているかを知ることが、改めて襟を正すことになりはしないかと。

ふみさんは、プラベーンらしい考えだ、それでようやく小泉がなぜブッシュの言いなりになるのか理解ができた、結局はアメリカの施しもので太ってきたからだね、と結んだ。

ホテル前でふみさんと別れ、我々はR I K Oに同行してもらって空港に向かった。空港で、軽くごたついたが、難なく通過した。ビジネスのラウンジに行つてふかふかのソファーに座つて、コーヒーを啜っていた。エコノミーの連中は一般待合室で我々に手を振っていた。カースト制度の強い州なのでローカーストの人々からビジネスの中が丸見えなのだ。

全員、無事、オンボードして、定刻にテイクオフした。